



瑞

以齋





賦字之事

賦、貢賦税也。又詩賦、不歌而誦曰賦者、古詩之流也。
賦物、其日の聖像へ貢ぐ心也。

古今賦ノ證歌

受花よむとひつるこゝろあちまきる手にいひて、
祇注曰或説うつくこといふ多し、
の用にたむさむ説也。

私云、連歌俳諧賦物、
私云、連歌俳諧賦物、
私云、連歌俳諧賦物、

賦字墨次之事

夕ニ一や字邊にぬれし海深し
右を面を紙を邊と取て紙と云字を神と取て神と音と
借る伊勢とありしと

二字返音

賦幕

つらきしをふ陽子秋七月

山嵐

是を限を返して幕と取

二字除篇

賦鳥

年の隙やあめ春野の相替ひ

今

是を物々の篇を條と取

三字中畧

賦足

らるるを出入りて約ありしを
定むる

是を何しを中畧して出入りて約と取

四字上下畧

賦織

むさし那をこゆるしを不三山
織え

是をむさし那の上下を四角して織と取

五字上中下畧

賦解

造木や庭より滝の多きところ
三余刻白 廣道公
是を多きところの上中下と略してとくと取こむまはるを
解の心あり

他添

賦圖

此のちのよきとやあはれ居り
十野 小通
是を多きところの字より川より(と)はるを略と取こ

賦物熟字

山何 何路 何木 何人 何船 已上五ヶの内
最可取之

山を伊路か崎を何と云ふまはる
一取玉はる山人也を登之處

是を五ヶの賦物と云はれば法師の住まはるハ三能地也
朝何 夕何 花何 花之何 唐何 青何 カケノ外取
可取之
白何 手何 下何 初何 御何 片何 厚何
何凡 何水 何屋 何所 何日 何草 何鳥
何馬 何色 何手 何心 何衣 何文 何物
何世 千何 玉何

山何 管、山管トト

石林原子規鳥跡巖隈河陰垣田
橋椿梨卯木井雲草下松守藍嵐
梅里沃木零雉岸衣北雪百合
水柴人姬蟬闌管烟醫方憂產
神木綿使祭寺聲鷹越迴

何路

家人今古市石細道夢西宮^苔下舟
遠山浦陰狩夜波旅宮空雲別
作長中馭海野車閣濱二天朝
東關坂岸田都湊神谷戀水

何木

帝鐸常盤年十唐竺丸志古見馴
磯馴玉染松枝流揮並我浮沈老
若愚白赤朽瓜山宿^リ松二船月
一百木名郎琴^子垣輪副冬

何人

家市里古棉浦宮花贄殿庭舩嶋
千都遠方老若友袖唐息狩通桂
田旅民鷹山深空月都常村昔哥
舞夢現鷓岡江田舍解衰思

雲上心天天津細代桺
霧之樵木津
白道行下諸升遠津障
束使端
政木氏

何船

春夏秋冬隻代出入稍
板石岩
初椿早鳩荷帆泊鴛御
友千波渡唐
桂河夜朝夕柴馬浮鴉
浦與津草上下
枝車屋形松芦葉水百
脚調鈴杉

朝何

市機度戶床鳥鷹渡凡
影東風嵐髮

霞顏河狩柏霧月日月
夜霜雲陰日
涼鳥菜紫起柴草舟冰
声水道出
寐羽沙句

夕何

采庭星泊千鳥渡霞顏
風影狩河月
日附日月夜露浪汐詠
雲草紅暮窟
山烟舟水手餐霧遁水
霜時雨涼躡躅

花

色蓮重笠影橘深妻男
女波野心笠
桺盛見人摺薄笈垣瓶
園山袋下陰

風篁

花之何

春林色錦白可友時樞契面別階鏡香
顏袂袖露埋木延雪山崙函古江木末
木之心木洞衣枝主盛木都下木紐雲白波
瀧穿走姿雪

唐何

系槽花橘機萩錦鳥伯神公之塩蓬竹玉
鞍名梨梅子紅葦梅桃造柴國草棉車
松墨文琴帟衣綾藍葵木絵人柔枕船声

青何

色糸稿石羽葉系袴田竹橘玉鷹椿波
苗菜梅馬海野雪草山洞駒木之縁摺
六月柴紅葉鷄鷺

白何

糸石羽花萩鳥髮重玉鷄玉椿枝躑躅
波雲唐真号菅鷺木菊尾木綿

手何

此字ニ限リ上賦
下賦トモニ用ユ

色糸板風玉漆車文心木引枕習繩

何手

衣麻織片纒染上山朝芦而蕨栢

下何

白色荻帶蕨風陰躑躅枯染露荻思
草焦心衣枝消水道緣亂柴繪極紐萌
裳涼並根声紅葉折

初何

花櫻色市春秋冬鷹鷺子規紅葉子日
毛之荻穗鳥將蕨凡着菜着水夜田
空卯花草時雨霜嵐手枕染苗雪山
藍烟船霧夢入物尾花

御何

池洗柱戶手帶顏將影神門垣笠代
田民鷹園衣袖空細杖津名渡哥井法
國寺社祭船琴心主榭木火裳物勢

片何

山袴帆破寄使結鷄下時戶岡思田舍
有舞心祭忘手嵐岸鋪時雨紐亂

何凡

春秋初家羽垂早帆山時津大津神川夜
谷下夕朝上浦濱荻與津松束手雨北西

漆南島関道汐板間冬

何水

春夏秋冬山河谷岩系石井花若下田玉
流雲雨水手朝夕沃沼池雪瀨極忘之煙

何屋

板石岩市放稲田萱尾瓦丸鳥虫妻馬車
長松草竹東苔蘚紫関濱磯杉塩糠水
芦

何所

出入糸田宮涼崙直繪

何田

山春夏秋冬石池小初濱漆遠岡川神
尺席野古青櫻水忍川荒

何草

春夏秋冬人磯水初若葉校庭新
茅千御唐一夜百夜百鏡田霞手向月下
七村推浮野翁思悉芝白田落イソカテ磗石日陰
葵山青朝夕

何鳥

初放庭千百唐山水夜田寐島浮野雲

系朝白色鳥管

何馬

板罕友老蒼竹夏冬移野上川青木白
繪放母初御

何色

接柳山吹木草系石初花菜花田金堂中
盤枯羽茅漆上下厚紅紫二青声浅水日
火一雀茅墨光苗

何心

片花世現下人山

何衣

色香羽葉漆狩初人織毛唐旅玉小忌
夏秋冬山方 equal 薄卯花古昔蚕麻
墨馴身代白下草布涼鷲墨垣

何文

石福内外鳥手川唐夜田使古古結大和

何物

初木卯取霜直織漆作唐力并リ御衣檜子津

何世

神千御万浮三七常同君

千何

木人鳥代年草船所寫里人重夜秋枝声
尋

玉何

霰梅江嶋河井水殿垣裳柏條也藤簾
常床鏡手箱但連琴絃

已上

上賦 賦物ヲ上ニ置ク山何類是也

下賦 賦物ヲ下ニ置ク何路類是也

追加薄何

板硯白霜漆香紅葉杉葉山吹

賦何事俳諧之建歌

蒲公葉や牛子おひきたるこも

山新の響き水そくくさる

又とて互互の証め子座ぬて

見え何るもの若角力のこら

友と名を呼ぶき月の色めふ

扇女よと掃よとさるそ枝

人形の持ち申ふむよるのあ

二肩やととととちろと鞠あ

そ指ぬを^{タカラ}とせさく大はるる

中宮の少神繪をうらふ糸

下四巻

古式御所の御女侍は衣十文章本八百負も取らざりし十
言半仕申人形の指車と取らざりし角力力車とをきり
是も心よりまゐりて斯くの袷あふらゆらねへまゐ

永正七年二月十二日於夢

何人亦一

其花は心そく心をあへんが

青柏

何路亦二

花もさるるやゆらのおひ峰の

春謀

初何亦三

花の月ある水く白ふ夕の

玄清

何亦亦四

あそくとくはとも花の目我らぬ

え登

青何亦五

花のぬえ極むと白ふ外山の

山宗折

何本亦六

雪もさるる花をそらふ山凡

山宗折

何因亦七

乙女子う袖やま花のあまらみ 棟

何二字返音

花よたちて衣よ石いすちあふぬ 宗徳

薄何才九

花よ子と花の思ふん風すき 道泉

御何才十

心らひの風やみ水も花すきり 性修本

永禄六年十二月十日

前右大臣入左公條の
三条西殿奉為松尾殿

何木才一

手と花をるゝ女世の恨さる 紹巴

何舟才二 十四日

情すいと思ふも物をあふの花

何人才三 十五日

せめてさハ云水ささみの花もうら

初何才四 十五日

草花より糸染もさるるけり

山何才五 十六日

言信ん答ももるあをきん

何田才六 十七日

山々七月より出るひらりうら

一字も及ぶ事七 十七り

石を築て定りうらるる中花月

何路才ハ 十七り

入方のそよみや清くは月

白何才九 十八り

清き水も手は埋めり夕ぐれ

何路才十 十八り

さこの山をたふりるは月

大永二年八月四日

於勢州太神宮御法事千句 金吾所二題を又

細川右京大夫高國

何才一

舟より舟四方にむつる雲の影 三國

三字中略才二

梅咲くありしもるひく柳も 宗長

何路才三

くふに花や水の代さける変れ花 宗碩

薄何才四

清くは花月夜月夜の花もきん 宗長

何人才五

ありく入るるを去るる山は 宗碩

何田才六

数やこころ月よこの春の秋のち

宗長

春何才七

春をゆく妻やぬる秋の秋のち

宗碩

何衣才八

深そるけ夕白うとねと春のち

宗長

山何才九

こころのれ生ふふはの今ねのち

宗碩

何不才十

心ぬるねの月うううふ宮のち

宗碩

慶長九年十二月四日

是社兼知十句

何路才一

あゝ路の名跡をたづねるは

兼知

白何才二

春の白子ぬるは神やあきのち

春何才三

心ぬるはこころの世を春のち

何人才四

一春うや春の路をたづねるは

何衣才五

涼しさをしのぐつらなる昔地が
層何れ六
うつらりて陰をみりきし小枝うさ
何首中七
志つらなるむらさき霞やこぼれ月
唐何れ八
あつらふよ夕さ(あ)鹿のみさ
一字中改中九
常なるぬ風をさるるさるる
何れ中十

とくあともちてその下なるるる
右巻川親長書留之写

